

西大寺の調査

—第341・342次

1 第341次調査

はじめに

この調査は、西大寺法寿院庫裡の立て替えに伴う事前調査として奈良市西大寺町で実施した。調査地は平城京右京一条三坊六坪、西大寺四王堂の北東に位置する。

調査区は、東西8m、南北7.3mで、北に東西1.5m、南北2.6mの拡張区を設けた。調査面積は62.3㎡である。

調査区の層序は、上から順に、黄色粘土混じり淡褐色土、黒褐色土、茶褐色土、灰褐色土または黄褐色土で、黄白色砂質土（地山）となる。調査区内では黄白色砂質土上面はほぼ平坦である。

検出遺構

西大寺造営以前の遺構は、その重複関係からA～C期の3時期がある。

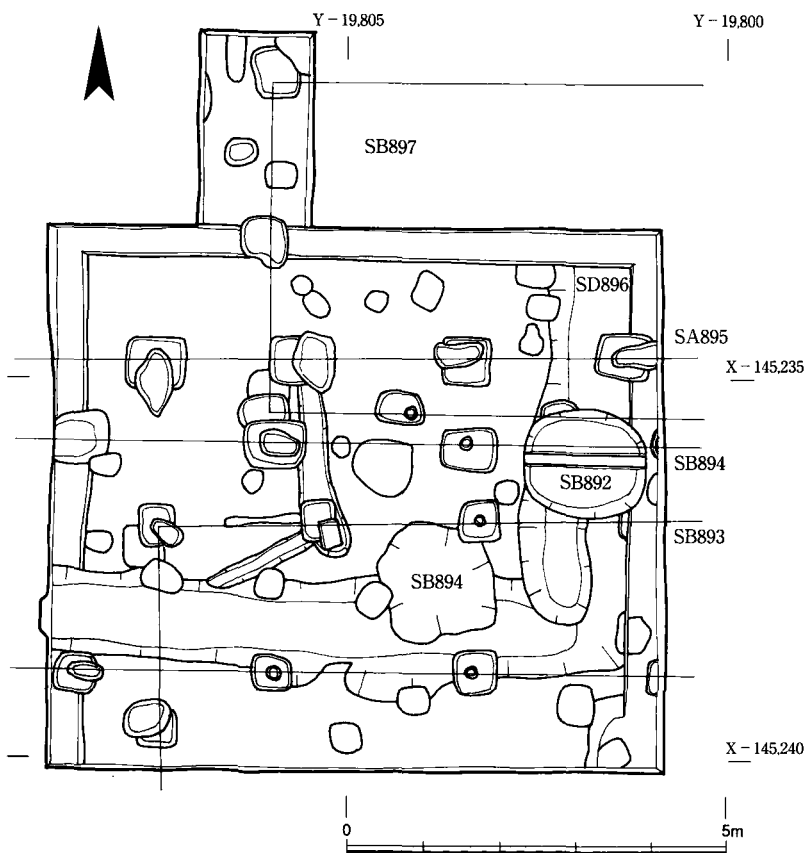


図169 第341次調査遺地平面図 1:100

<A期>

SB897 調査区東北部の東西棟掘立柱建物。桁行3間以上(1.8m等間)、梁行2間(2.25m等間)で、柱掘形は一辺0.4~0.7mの長方形で、深さは現状で0.4mある。

<B期>

SB894 調査区の南北中央に位置する東西棟掘立柱建物。桁行5間以上(2.55m等間)、梁行2間(1.5m)等間とみられる。柱掘形は一辺0.5~0.7mの長方形で、径0.2mの柱痕跡が残るものがある。

<C期>

SB893 調査区の南半部にある東西棟かともみられる掘立柱建物。桁行4間以上(2.1m等間)、梁行2間以上(2.4m等間)である。柱掘形は一辺0.4~0.7mの方形で、深さは現状で0.4mある。この北、2.5mに東西の掘立柱塀がある。柱掘形は、一辺0.7~0.8mである。

西大寺造営以降の遺構には、井戸2基、溝などがある。出土遺物から、これらはすべて江戸時代以降に下る。

SE892 調査区の東側中央にある井戸。上幅約1.5mで、井戸枠等は抜き去られていた。深さは、0.6m以上である。

SE894 調査区のほぼ中央にある井戸。上幅約1.5m、深さは現状約0.5mで、井戸枠は抜き取られていた。

SD896 調査区の東側と南側にあつて、やや北で東にふれてほぼ直角に折れ曲がる溝。上幅1.3m前後、深さは現状で約0.3mである。

建物の柱穴からは奈良時代前半の須恵器杯Bが出土している。

まとめ

今回の調査で明らかになった点を次に列挙する。①調査区内において、条坊道路は検出されなかった。②西大寺造営以前の遺構が、3時期にわたって重複していた。柱穴の規模から、坪の東北隅にあつて雑舎程度の建物と考えられる。③西大寺造営以後は、四王堂に近接した地点であつて、空閑地として利用された。④子院の建設に伴い、井戸や溝などの生活遺構が出現した。 (深沢芳樹)

2 第342次調査

はじめに

本調査は、防火用放水銃施設移設に伴う事前調査として、西大寺四王堂の西側に南北の2箇所の調査区を設けて実施した。このうち北区は、1985～89年度に行った西大寺防災施設工事前調査のうち、四王堂西で実施した1986IX調査区北端が東に折れ曲がった部分の東に接してあり、報告書（『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編 1990）において創建四王堂の西北隅柱を推定した位置が、本調査区の中央やや西寄りに含まれる位置にあった（図172）。このため、本調査区は、北西隅柱穴の存否の確認を主目的とすることになった。また南区は、1986IX調査区の南半部東にあ

たる位置にあつて、四王堂南西部地域の様相の解明を目指した。

北区の調査

調査区は、南北2.5m・東西5.8mの長方形を呈する。層序は、東側では約40cmの褐色土（表土）直下で、基壇土を検出することになった。東側はこの上面が、遺構検出面となり、基壇土上面で礎石据付穴、柱掘形、抜取穴を検出した。西側では基壇土から西に傾斜堆積があり、上から順に黒褐色土、褐色土、黄色土混暗灰色土、暗灰色土、茶灰色土、茶灰色粘質土、黄白色土・淡灰褐色砂質土（地山）となり、淡灰褐色砂質土上面で遺構検出を行った。

基壇は、平面で調査区東側で東西2.15m分検出した。調査区では、まず黄白色土・淡灰褐色砂質土（地山）を

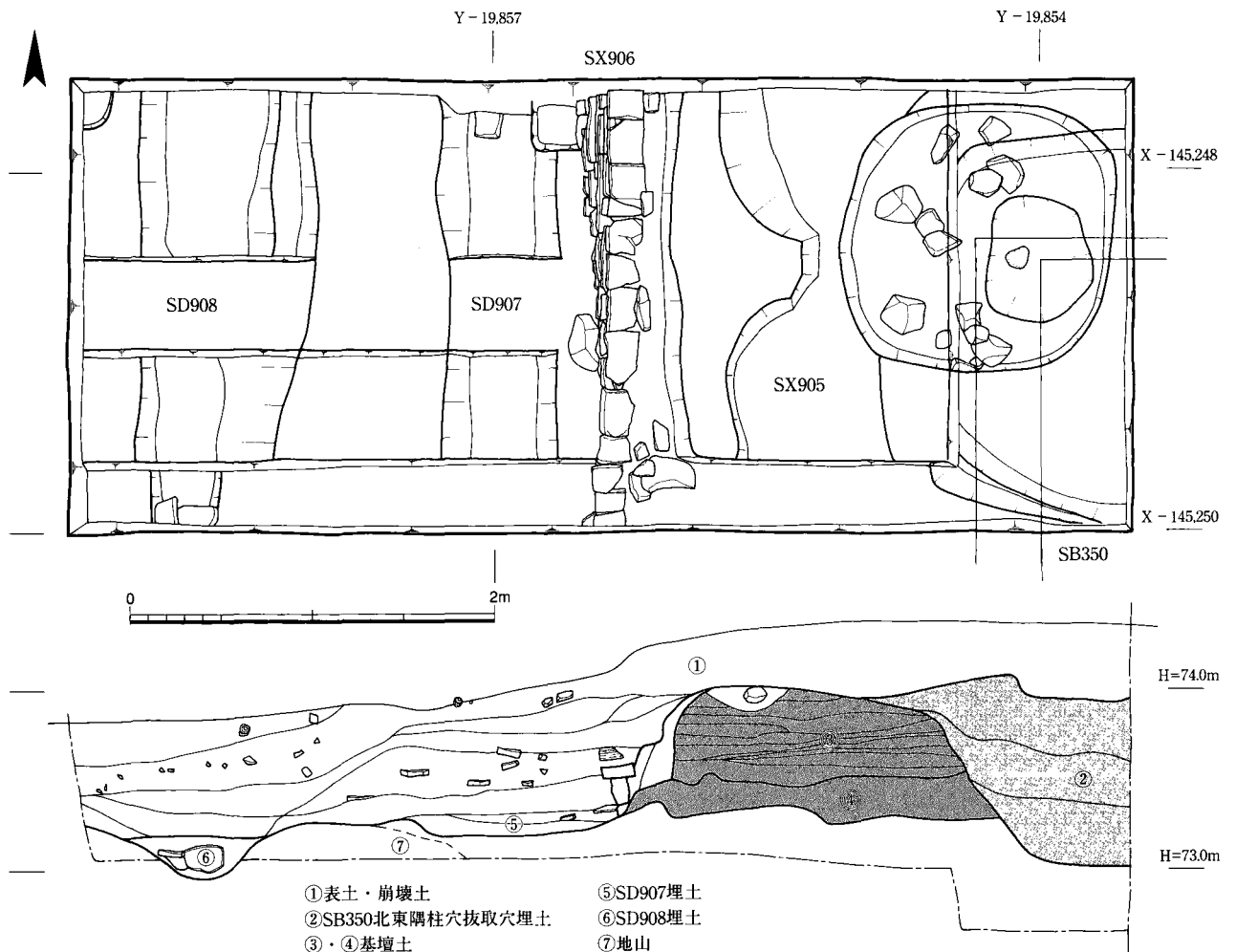


図170 第342次調査北区遺構平面図・南壁断面図 1:40



図171 瓦積基壇と現四王堂（北西から）

平坦に削平しており、基壇部分のみ黒褐色シルトを約20cmの厚さで敷き、さらにこの上に石混明黄色土や黒褐色土などを丁寧に版築して積み上げていた。地山上面からの基壇現状高は、約0.7mである。基壇縁は、基壇土を積み上げてから、一部を削り落としてから、瓦や凝灰岩を据え、さらに裏込め土を入れる瓦積基壇。ただし、調査区の北半では平瓦の側面を外向きとするのに対して、南半は基底部に凝灰岩をその上に軒平瓦の瓦当部を外側にして並べ、そして平瓦をのせており、瓦や凝灰岩の並べ方に、統一性がみられない。瓦積基壇に用いた軒平瓦は合計8点ある。その内訳は、6732Q 2点、6732X 1点、6732Z 1点、6732不明 1点、といった奈良時代の瓦に、平安時代の軒平瓦7279が2点混じっていた。

調査区東端で、巨大な柱掘形を検出した。東西方向は東辺が調査区外にあって不明で、南北は2.15mある。深さは現状で、1.34mである。柱穴底面は、ほぼ平坦だが、中央やや西寄りが南北0.7m・東西0.6mほどの範囲が約0.1mくぼんでおり、ここが柱の当たった位置である可能性が高い。この位置から基壇縁までは、2.4mであっ

た。柱掘形の埋土は、10cmほどずつの水平堆積となっていた。

この柱穴には、抜取穴がみられる。埋土は、灰色土混黄色土などが、傾斜堆積する。

この抜取穴に重複し、かつ新しく礎石据付穴を掘っている。径約1.5mの円形状を呈し、現状での深さは約0.4mである。埋土は、黄色土混褐色土で、ここに20~30cmの石を据えていた。礎石は、残存しない。なお掘立柱柱穴の柱の当たりと推定した位置は、礎石据付穴に平面的に重複している。

基壇外周に雨落溝を構築した形跡はない。ただし基壇縁に沿う、幅約1.1m、深さ0.1mで細砂を包含する流路SD907を検出したので、これが雨落溝の機能を果たしたと推定する。

調査区西側には、中世以降に下る南北溝や小土坑を検出した。ただし、柱穴の西側では、地山の検出高が、柱穴の底面高より0.2m以上高いので、少なくとも西側5mの範囲には柱穴を想定することはできない。したがって、今回検出した柱穴が、大型建物SB350の北東隅柱であることが確定した。

南区の調査

南区は、南北1m・東西2mの調査区で、層序は褐色土（表土）の直下が、黄白色砂質土（地山）となる。黄白色砂質土の上面で遺構検出を行った。調査区西寄りに、上幅0.65m、深さ現状で0.17mで、白色土混褐色土を包含する南北溝SD918を検出した。また西端部では、小土坑を検出した。南区では各遺構から遺物が出土しなかったため、所属時期を決定できない。

まとめ

今回の調査において、明らかになった点を列挙する。
 ①四王堂創建時の基壇を検出した。
 ②平安時代に行った基壇縁の改修時、創建時の基壇をほぼそのまま踏襲した。
 ③今回検出した1辺2mを越える巨大な柱掘形は、創建当初の建物の柱穴である。
 ④この掘立柱柱掘形は、その北東隅柱に当たる。
 ⑤ほぼ同一位置に、礎石建物を造営した。
 ⑥礎石建物も、創建時の規模を踏襲した可能性が高い。
 ⑦これまでの調査成果と合わせると、四王堂の規模は東西が32.6m、11丈となり、『西大寺資材流記帳』西大寺本の記載に一致する。
 ⑧次に創建四王堂の復原案を金井健が示す。
 （深沢芳樹）

創建四王堂の復原

今回の調査で、創建時の四王堂は『流記資材帳』の記載どおり、桁行11丈（110尺）の規模であったことが判明した。ここでは、既往の発掘調査（西大寺防災施設工事発掘調査・1985～1989）での成果も含め、創建四王堂の規模について得られた知見を整理しておきたい。

まず、『西大寺流記資材帳』は、創建四王堂の規模を「桧皮葺雙堂二字 各長十一丈（二イ）雙広八丈六尺」と記している。『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』では、創建四王堂の規模を桁行12丈に復原しているが、今回の調査で、12丈とした場合の西北隅側柱の推定位置から柱の痕跡は検出できなかった。さらに、西大寺に残る『流記資材帳』が「各長十一丈」と記していることを考えると、創建四王堂の桁行規模は11丈とみてまず間違いはない。

つぎに、想定される四王堂の正堂は、桁行7間・梁行4間の四面庇建物である。柱間寸法は総長110尺×58尺で、桁行は身舎16尺の庇15尺、梁行は身舎14尺の庇15尺、となる。この復原案は、今回検出した西北隅の側柱穴と、既往の調査で検出した南側柱の西から3つめにあたる柱

穴に因っている。この柱穴が正堂のものか礼堂のものかは明らかではないが、柱穴の平面規模・深さともに、今回検出した柱穴と一致するので、正堂の側柱穴と推定した。また、この場合の桁行方向の実長は32.6mで1尺約296.36mmとなり、古代尺として適当な数値を得る。

礼堂については、これまで発掘調査による知見は全く得られていない。仮に、本堂との間を14尺、礼堂を梁行14尺の細長い切妻建物に想定すれば、梁行の総長は86尺となり『流記資材帳』の記載と一致する。創建四王堂の基壇規模は明らかではないものの、仮に平安再建の四王堂が創建時の基壇規模を踏襲したとすると軒の出は約7尺となり、今回復原した平面規模とよくなじむ。今回の調査で、平安再建時の西北隅側柱の礎石据付痕跡を創建時の柱穴とほぼ同じ位置で検出したことを考えると、平安再建の四王堂が創建時の平面規模を踏襲した可能性は極めて高い。

とはいえ、四王堂にかかわる発掘調査は部分的な調査に止まっており、明確な復原根拠を示すには至っていない。今後の調査に期待したい。（金井 健）

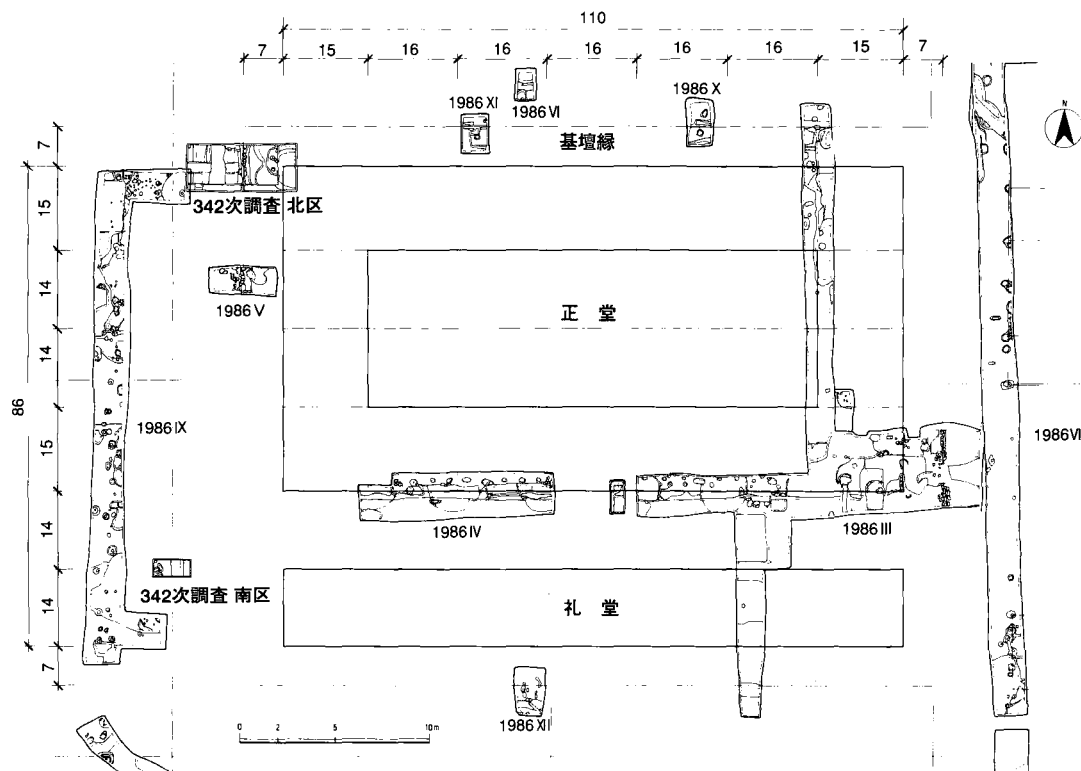


図172 創建四王堂 推定復原平面図 1:400 単位は尺(1尺=296.36mm)